

平成 28 年度第 2 回入学試験問題

国 語

「始め」の合図があるまでは問題を開いてはいけません。

注 意

- 1 「始め」という合図で始め、「やめ」という合図で、すぐに鉛筆をおきなさい。
- 2 問題は 2 ページから 8 ページまでです。
- 3 解答用紙は問題冊子にはさまれています。
- 4 初めに、解答用紙に受験番号・座席番号・氏名を記入しなさい。
- 5 答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 6 字数制限のある問題については、かぎかっこ・句読点も一字と数えなさい。
- 7 文字はていねいに書きなさい。
- 8 質問や用があるときは静かに手をあげなさい。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「亨」は死んだ父親から奥秩父の山小屋を受け継ぎ、春の小屋開けに向けて準備をしている。相棒の「ゴロさん（多田悟郎）」は亨の父親に世話になった縁から山小屋で働いており、小屋が冬季閉鎖されている間は都会でホームレスのような生活を送っているが、今は山に戻り亨のポッカ（山小屋に人力で荷物を上げること）を手伝っている。

ゴロさんが荷物を置きに従業員の部屋へ向かっているあいだに、亨は食堂のテーブルにお茶と茶菓子を用意して、1本題に入る準備を整えた。着慣らした綿入れ半纏を羽織って、ゴロさんは間もなく戻ってきた。

「どうしたの。えらくサービスがいいじゃない。よからぬ魂胆でもあるんじゃないの」

ゴロさんはさつそく「**一**」を叩く。それがなにやら皮肉に聞こえるのは、こちらが意識過剰になっている証拠だろう。

亨は気持ちを落ち着けるように茶を啜り、さりげない口調で切り出した。「じつは今年の二月に、東京から刑事が来たんだよ。こんなものを持って」

尾木が置いていった指名手配のチラシを差し出すと、ゴロさんはそれを「瞥して吐き捨てるように言った。

「似てるって言うのかい、このおれに」

その言葉はaイヒヨウを突いた。血相を変えて別人だと否定すると思っていた。ゴロさんの妙に醒めた物言いは、ある種の諦念のようなものさえ感じさせた。

「去年、この小屋に立ち寄った登山客の誰かが通報したらしいんだ——」戸惑いながら尾木とのやりとりを語って聞かせた。ゴロさんはどこか思いつめたような表情で、黙ってそれを聞き通した。

「他人の空似だと思っただけだね。ゴロさんには一応話しておいたほうがいいと思っただけ」

努めて気楽な口調で付け加えると、ゴロさんは暗い眼差しを亨に返した。「どうしてそいつに教えなかったんだよ。こいつとおれは瓜二つだって」予期せぬ反応に亨は慌てた。ゴロさんが覗かせた感情は、憤りとも悲しみともとれるものだった。

「似ているといえれば似ているけど、同一人物だという確信は持てなかったし——」

「あんたもおれを疑ったということだよ」
「どうしておれがゴロさんを」

「信じられるんなら隠し立てする必要はないだろ。犯人かもしれないと思っただから、そいつにおれのことを言わなかったんだろ」

ゴロさんの言葉は胸を抉った。たしかにそんな理屈も成り立つ。ゴロさんが犯人ではないと信じられたなら、尾木に事実を告げてもかまわなかったのだ。しかし亨が惧れたのは、彼が冤罪を被る危険性でもあった。

「それは違うよ。ゴロさんを信じているからこそ警察の手に渡したくなかった。おれの手で守りたかった」

亨は必死にbベンメイしたが、ゴロさんは聞き流すように茶菓子を口に抛り込み、いかにも苦そうにお茶を啜った。

「だったら、もしおれが犯人だとしても、黙り通してくれるのか」
試されているような気がした。同時にゴロさんへの信頼が音もなく崩れはじめた。なぜいつも**一**で笑い飛ばしてくれないのだ。自分はこんなに

不細工じゃないとでも、あるいはそんなけちな悪事は働かないとでも。「本当のことを教えてほしい。この似顔絵の人物はゴロさんなのか。別人ならそう言っただけじゃない。証拠を示せなんておれは言わない。ゴロさんの言うことをそのまま信じる」

「十何年も昔の話だ。やらなかったと言ったって証明する方法はなにもない。それでもおれが信じられるか」

ゴロさんは穏やかに、だがしたたかにcカクシンを突いてきた。亨はそこで言葉に窮した。もし彼が犯人だとしたら、あるいは犯人かもしれないと

「ああ、亨ちゃん。A 人生には落とし穴がいっぱいある。だれも好きこのんでそこに落ちようとは思わないが、おれは馬鹿だから何度も嵌はまっちゃった」

「ただだね。その落とし前を他人につけてもらおうなんて一度も思ったことはない。B 自分の人生が不幸だとも思わない。雨が降ろうが風が吹こうが、自分にあてがわれた人生を死ぬまで生きてみるしかない。人間なんてしよせんそんなもんだらう」

「D つまりおれとあんたの付き合いも、そろそろ潮時だつてことだよ。恨みごとを言ってるわけじゃない。むしろ感謝してるんだよ。おれみたいな半端者はんぱものでも人並みに扱ってくれたからね。あんたも、あんたの親父さんも」

「言いたいのはそういうことじゃないんだよ、亨ちゃん。C 与えられた運命に逆らつたつて、得することなんかにもない——」

「ああ、居続ければ、きつとあんたにも災難が降りかかる」

「自分が犯人なのかどうかを、ゴロさんは決して明らかにしようとしな。それが瑣末なことに過ぎないともいうように。2 もっと大事なことが別にあるともいうように——」

「警視庁の尾木です。このたびは多田さんの件で大変ご迷惑をおかけしまし

雇用主ではいたくなかっただけなのだ。

「気まずい沈黙が流れた。二人は交互に茶を啜り、茶菓子を口に運び、ゴロさんは煙草に火を点けた。3 亨の心は真冬の底冷えのような寂寥せきりょうに震えていた。」

この後、山小屋に刑事の尾木がやって来てゴロさんを逮捕し連行していった。

翌日から連休のためのポツカに取りかかった。ゴロさん抜きで果たしてやりきれるか、ほとんど自信はなかったが、そのハードワークはゴロさんを失った寂しさを紛らすために、いまの亨に必要なものだった。

「ゴロさんが連行されて以来、テレビはまったく観なかった。麓へ下りても新聞は読まなかった。彼が真犯人かどうかは亨にはどうでもよかった。あの日、ゴロさんは言った。」

（II）

まるで人生の敗北宣言のようなその言葉を、亨はいまも呑み込みかねていた。それがたとえ冤罪だとしても、与えられた運命なら受け容れるということか。それは彼が生きる世界への絶望を表現したものなのか。それともそんな人生の受容の先に、なにか希望が見出せることも言おうとしたのか。

語り合うべきことを語り得ずに父とは死別し、ゴロさんもまた心の真実を語り尽くすことなく亨のもとを去った。彼らが気前よく残してくれた孤独という置き土産を、正直、亨は持て余していた。

たった一人でのポツカはやはりはかどらず、ゴールデンウィークを目前にした四月の下旬に入っても、まだ予定の三分の一も進まない。疲労も限界に達して、その日は休みにしようと思つて朝寝坊を決め込んでいたところを、携帯電話の呼び出し音で起こされた。

慌てて耳に当てると、流れてきたのは忘れもしないあの男の声だった。「警視庁の尾木です。このたびは多田さんの件で大変ご迷惑をおかけしまし

て」

馬鹿に低姿勢だ。当惑しながら問い返した。

「迷惑って、どういうことでしょう」

「報道でご存知かと思っただんですが」

こんどは尾木が当惑する。亨はやむなく説明した。

「あれからテレビも新聞もみていないものですから」

「そうですね。お気持ちちはわかります。じつは真犯人が自首してきました」

「真犯人が自首——」

「別件の傷害事件で収監中の男でした。多田さんの逮捕をニュースで知って、呵責に堪えられなくなったようです。自分の代わりに無実の人間が罪を着せられるのは忍びないと」

「要するに誤認逮捕だったわけですね」

思わず言葉が鋭くなる。恐縮したように尾木の声が小さくなる。(中略)

尾木は平身低頭といった調子で電話を終えた。

ゴロさんは無実だった——。そのニュースは、体じゅうに滯っていた血液が一気に流れ出したような喜びをもたらした。

しかしその一方で、彼が連絡を寄越さないのが気がかりだった。逮捕された日の会話を思い出し、無実が証明されようがされまいが、彼は亨とこの小屋に、あのおき別れを告げたのだと納得せざるを得なかった。

切ない思いが込み上げた。けっきょく自分もゴロさんを信じてやれず、冤罪を被る瀬戸際まで追いやった。その点では尾木たちと同罪なのだ。

そんな思いに鬱々とし、なにをやる気力もなく布団に潜り込んだとき、外で気になる音がした。ザツ、ザツ、ザツ、ザツ。残雪を踏みしだく力強い足音。そしてあのリズム。亨の心と体にそれは記憶として刻まれていた。

ゴロさんとともに繰り返した春のポッカ——。苦しいけれど気持ちは弾んだ。父が愛した奥秩父の自然が五感を通して語りかけてきた。ヤマガラの囀り、笹擦れの音、沢のせせらぎ、梢を吹き渡る風の音——。生前の父が語り得なかった言葉を、亨はそんな自然のざわめきのなかに聞きとった。

足音はゆっくりと、だが確実に近づいてくる。朝霧が陽光の温もりに融けていくように、4心を覆っていた暗い翳りが消えてゆく。

布団を撥ね退けて、亨は戸口へ駆け出した。自分の背丈ほどもある荷物を背負い、まだ雪の残る沢の源頭をゴロさんが登ってくる。運びきれずに林道の終点に残しておいた小屋の荷物、亨とゴロさんの5春を背負って——。

亨の姿が気がつくと、ゴロさんは照れたように笑って手を振った。

(笹本稜平『春を背負って』〔文藝春秋〕より)

問1 傍線部 a、b、c のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 傍線部 1 「本題」とありますが、このあと亨はゴロさんにどのような質問を突きつけることになりましたか。最もふさわしい一文を本文中から抜き出し、その最初の三字を書きなさい。

問3 に最もふさわしいことばを次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、 は二ヶ所あります。

ア 大口 イ 冗談 ウ 嫌味 エ 軽口 オ 不平

問4 傍線部 2 「もつと大事なこと」とありますが、二人の関係において、ゴロさんが最も大事にしたこととは何だったと考えられますか。解答欄に合うように、説明しなさい。

問5 傍線部 3 「亨の心は真冬の底冷えのような寂寥に震えていた」とありますが、この時の亨の心情の説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ゴロさんが小屋を去ることが決定的になり、どうしようもない孤独にさ
いなまれている。

イ 自分の言葉がきっかけでゴロさんを激怒させてしまい、後悔してもしき
れないでいる。

ウ 山小屋の経営者として、人間関係を良好に築けなかった挫折感ざせつかんにうちひ
しがれている。

エ はからずもゴロさんを疑うことになってしまい、自ら謝罪したくなって
いる。

オ ゴロさんの本当の思いに気が付かなかった自分の鈍感どんかんさに、あきれかえ
っている。

問6 IIに最もふさわしいことばを、本文中の傍線部A～Dから選び、
記号で答えなさい。

問7 傍線部4「心を覆っていた暗い翳り」とはどのような思いですか。そ
れがよく表れている段落を本文中から探し、その最初の三字を書きな
さい。

問8 傍線部5「春を背負って」とありますが、「春」は何の比喩ひゆですか。
その答えとして最もふさわしいことばを漢字二字で、傍線部3より後の本
文中から抜き出しなさい。

二 次の文章A・Bは、いずれも斉藤淳『10歳から身につく問い、考え、表
現する力』の一節です。これを読んで、後の問に答えなさい。

文章A

国のあり方が根底から変わり、さまざまなかぐらウンドを持つ人たち
とともに課題を乗り越えていかななくてはならない時代では、どこに所属して

いるか、ということは今まで以上に意味がなくなってくるでしょう。ひとり
の人間として、知的な面で社会にどんな貢献こうけんができるのか、1求められる資
質も当然、変わってきています。

例えば「知識」への評価。情報端末じょうほうたまたまにキーワードを入力すれば、簡単に
さまざまな情報が手に入る便利な時代になりました。こうした技術進歩の裏
側で、人間がこれまで手にしてきた知識の価値に変化が生じています。知識
が稀少きせうだった大昔なら、「昔こんなことがあった」と地域の歴史に通じ、天
変地異の予兆となりうる現象について熟知していた長老の経験には大きな価
値がありました。現代における受験秀才も、ITが普及する前なら、丸暗記
した知識そのものに価値があつたのかもしれませんが。

しかし今となつては、ただ単に物知りなだけでは検索エンジンに太刀打ち
できません。情報端末自体もウェアラブル、つまり装着可能になりつつあり
ます。グーグル眼鏡はそのさきがけですが、さらには情報端末が身体の一部
に組み込まれる時代が来るといわれています。機械と人間を結ぶインターフ
エースが進歩していくなかで、知識を持つことの意味そのものが変化しつ
つあるのです。

このように情報の入手自体が容易になる技術変化が起こり続け、しかも人
間の身体と外部情報が融合ゆうごうしつつある時代だからこそむしろ、人間は自らの
能力を高めるために、また情報自体の価値がわかるように、ゼロから考える
思考力が必要になる、そしてその価値は重要になっていくであろうと予想さ
れます。

ぼくがここでいう「ゼロから考える思考力」は、素手すてで生き延のびるための
サバイバル技術と似ているかもしれません。マッチやライターがあれば、誰
も火種を保存したり、何もないところから火をおこすための苦勞をせずに済
みます。もちろん、進んで不要な苦勞をする必要はありませんが、一方で人
類が火を手に行なうことによって何を得たか、野外でキャンプをするなどの経
験をしなければ想像することも難しいでしょう。学校教育でも農業体験や自
然体験を得るためのキャンプが行われたりしますが、現代に生きる意味をか

みしめるためにわざわざそのような経験をさせているのです。

昔、例えば2古代中国であれば、才能や知識のある者を食客として迎え入れ養い、必要に応じて意見や知識を求めることは事実上、貴族にのみ許された特権でした。現代では、ネットにつながることで誰もがそのような特権を手にしたとさえいえます。しかしながら、ぼくたちはその事実を受け入れ、生き延びるための準備をしてきたでしょうか。ゼロから考えて判断する能力がないと、情報の海で溺れてしまいかねない、そんな時代であることを十分に意識しておく必要があります。

このような時代の変化に直面しつつ、生き抜く力として本質的に重要なのは、新しい価値を発見したり、つくり出したりすることができる力です。その基盤、土台となるのが「教養」、それも、新しい時代に必要な教養です。(中略)

文章B

日本の小中高のカリキュラムは、大学入試をひとつのゴールとして設計されています。中学受験をしなくても、ほとんどの子どもが高校受験を経験しますし、大学受験も多くが経験します。つまり、大学に入るために、日本の子どもたちはゆるやかに長期間にわたって受験勉強を続けているわけです。

問題は、日本の入試が知識偏重型であるという点です。そうした試験に対応するため、勉強も必然的に「正解」をゴールとするものになります。

「は？ 正解を目指すのは当たり前じゃないか」、そう思われるのも無理はありません。ぼくたち親世代も、今の子ども同様、「正解」へ至る道順を覚える学習法しか教えられてこなかったのですから。しかし、いきなり「正解」に飛びつこうとする態度は、クイズ大会ならいざ知らず、実社会では使い物になりません。

学問や実業の世界での「正解」は、受験勉強で選択肢のなかから選ぶような「正解」ではないことが多々あります。いきなり正解に飛びつくのではなく、正解を導く過程や、失敗したときの対処法こそが大切なのです。正しい

かどうかわからない、不確実性が高い場合にどのような判断をしたほうがよいのか、これも含めて考える力を養っていかねければなりません。

生きていくうえで「正解がない」状況は頻繁に発生します。むしろ重要な課題ほど正解がないことが多いのです。この「正解がない」状況というものは、いかなるものでしょうか。第一に、事実かどうか判断する材料に乏しく、**3 正解**かどうかわからない場合です。第二に、価値判断に関わる問題については、判断する主体の数だけ正解があります。

学問は常に進歩を続け、知識は常に更新され続けます。学問や科学がいかなる営みかについてはおおいおい詳しく説明しますが、いわゆる事実として受け入れられている知識には、さまざまな前提が伴います。「正解だから正解」のではなく、さまざまな検証や反論を乗り越えてきた学説だからこそ、「現段階で」最大公約数的見解として「正解らしい」と受け取られているにすぎないのです。昨日まで正解だったものが、今日は違うということが起こります。

例えば国宝・源頼朝像。誰もが教科書で見たことのある京都神護寺所蔵の絵ですが、最近の教科書では「この肖像画は、源頼朝像と伝えられる」「伝源頼朝像」と保留つきの表記になっています。

実はこの絵に描かれた男性が頼朝であるかどうかは、以前から歴史学や美術史学の世界では疑義が出されていました。一九九〇年代になって画像解析技術が進んだこともあり、どうやらこの肖像画に描かれているのは源頼朝ではなく、足利尊氏の弟、足利直義ではないかというのが定説になりつつあります。

他にも、「足利尊氏像」とされていた肖像画が、どうも尊氏の家来である高師直がモデルではないかという説が優勢になり、単に「騎馬武者像」と呼ばれるようになったり、十七条憲法を制定した聖徳太子が、実は実在していなかったのではないかという説が出て物議を醸すなど、日本史だけに留めてみても、かつて「正解」として暗記させられていた知識の確からしさが疑われるという事例は枚挙にいとまがありません。

これらの例から得られる教訓は、いわゆる源頼朝像を「正解」として覚えることよりも、それがなぜ正解でなくなったのか、推論の過程を理解することこそが重要だということです。そもそも、教育の場で常識や正解として受け入れられている作法や知識のなかにも、学術的な根拠の怪しいものが含まれているかもしれないのです。また、学問には、その最先端に近づけば近づくほど、何が真理かは自明でなくなるという一面もあります。

このようななかで、問われるべきは「正解とされてきたものは何か」ではなく、「正解という前提が崩れてしまったときに、どのように対処すればよいのか」ということです。それはとても苦しい営みです。答えはすぐには出ず、試行錯誤の連続でしょう。

日本の教育は、ある意味で最低限必要な常識を入手するためには適しているのかもしれませんが、自分で深く物事を考えたり、世の森羅万象を理解するためにこれまでに存在しなかったものの見方をしたりするには、あまり適していないのではないかと感じるものがよくあります。

しかも、部活や習い事、塾や宿題で、子どもたちには試行錯誤をする時間的・精神的な余裕はあまりありません。中学入試に参加することを決断した段階で、組織的に詰め込む努力を強いられるという点は、あらかじめ織り込んでおいたほうがよいと思います。試行錯誤自体を目的にする必要はありませんが、試行錯誤を許す余裕がないと、ものを考える楽しみや苦しみが理解できません。

4 「正解がない」の二つめ、価値判断による問題がまだ残っていました。

頼朝像のような、事実認定に関する問題については、正解か否かは、真か偽かの判断とその不確実性というかたちで処理できます。しかし善悪、美醜といった価値判断を含む問題については、何通りも正解が存在することになります。むしろ、なぜそのように考えるか、説明をしていく作業が重要になります。

そのために必要な知的基盤となるのが、自分の頭で「問う」「考える」「表現する」力です。頭から正解を覚え込もうとする態度は、問いかける問題の

種類を最初から制限し、考える作業を放棄しているという点で大変に怠惰です。そして、ある意味で日本の教育は、こうした怠惰な態度を押しつけているともいえます。

正解の存在しない時代を生き抜くために必要な力は、先にも述べたように、新しい価値を発見したり、つくり出したりすることができる力です。新しい価値を発見する前提として、自分にとって「価値がある」とはどのようなことかよく理解する必要があります。

自分の価値観を理解するためには、それを言葉で表現する力が必要になります。そして他者にとつても「価値がある」とはどのようなことか、同じようによく理解することが必要になります。つまり人間の幸せの基盤に何があるのかをよく考え、納得していることが大切だといえます。

それは、見方を変えれば、5 「人間にしかできない」営みとは何かを問いかけて、到来する未来を見越して可能性を開いていこうと努力することだともいえます。

グーグルは、全自動運転の自動車を開発しています。同社の開発スケジュールによれば二〇二〇年ごろに実用化することを目指し、二〇一四年夏にも公道での走行実験を開始することです。全自動運転が実用化されれば、人間は自動車を運転する必要がなくなります。通勤に自動車を使っている人にとつては、朝晩の出勤時間に読書を楽しんだりする余裕が生まれるかもしれません。一方で、運転に関係するあらゆる仕事が機械に取って代わられ、大量の失業が発生するかもしれません。道路の使い方も大きく変わり、趣味として自動車を運転することすら、レース・サーキットのような場所を除けば許容されなくなる時代が来るかもしれません。

何度も繰り返されるルーティン化された作業は機械に取って代わられる時代です。自動車の運転だけではありません。病気を診断したり、裁判の判決を書いたりする高度に知的な作業ですら、コンピュータのほうが正確に、緻密に、迅速に行うことができるようになってきています。人間でなければできない、人間だからこそできる仕事の領域がどんどん縮小している、ぼく

たちはそのような時代に生きています。

人間の仕事が、判断に特化していけばいくほど、「価値観の多様性とうまく合うか」が重要になります。利害や価値観の対立を乗り越え、合意を形成していかなければならない場面では、自分や相手がどこまでなら譲れるのか理解し、平和的に共存していくためのメカニズムを構築していかなければなりません。これはかなり創造力が必要な仕事であり、人間にしかできない仕事だといえます。

変化しつつある世の中で、自分はどのような役割を果たしたいか、自分が一生かけてやりたい、取り組みたいことは何か。これこそ、決まった正解はありません。人間だから、自分だからできることはすなわち、自分の頭で問い、考え、表現することそのものなのです。

(斉藤淳『10歳から身につく問い、考え、表現する力』(NHK出版)より)

問1 傍線部1「求められる資質」とありますが、筆者によればそれは何ですか。文章Aの中から十字以内で抜き出しなさい。

問2 傍線部2「古代中国であれば、才能や知識のある者を食客として迎え入れ養い」とありますが、知識のある者が食客として大切にされたのはなぜですか。解答欄に合うように、文章Aの中から十字以内で抜き出しなさい。

問3 傍線部3「正解かどうかわからない」とありますが、次の文は筆者の考える学問の世界での「正解」について述べたものです。X・Yにふさわしいことばをいずれも十五字以上二十字以内で書きなさい。ただし、本文中のことばを用いなさい。

筆者によれば、いわゆる「正解」とは、Xという過程を経た、Yでしかないのである。

問4 傍線部4「『正解がない』の二つめ、価値判断による問題」とありますが、筆者が考える「正解がない」とは、ここではどういうことですか。文章Bの中で、傍線部4より前から、最もふさわしい部分を解答欄に合うように十五字以内で抜き出しなさい。

問5 傍線部5「『人間にしかできない』営み」とありますが、筆者によればそれはどういうことですか。文章Bから最もふさわしい部分を十五字以上二十字以内で抜き出しなさい。

問6 次の中から本文の内容に合うものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 正解の存在しない時代を生き抜くためには、情報の海で溺れてしまわないようにコンピューターよりも優れた判断ができる能力が求められる。

イ 正解の存在しない時代を生き抜くためには、他者と価値観が対立するときにも、それを乗り越え、共存していくための仕組みを作り上げる必要がある。

ウ 正解の存在しない時代を生き抜くためには、人間だからこそできる仕事の領域を維持することで、変化しつつある世の中で自分の果たす役割を守らねばならない。

エ 正解の存在しない時代を生き抜くためには、まず事実認定に関する問題を処理する能力を身につけることが、善悪、美醜といった価値判断の問題を解決する力を養うのに役立つ。

オ 正解の存在しない時代を生き抜くためには、まずは自分にとって「価値がある」とはどういうことを理解し、他人にとっても「価値がある」とはどういうことを理解する必要がある。

カ 正解の存在しない時代を生き抜くためには、それが正解でなくなった理由について考える時間的なゆとりを持ち、ものごとの真偽、善悪を見極める力をつちかねばならない。

